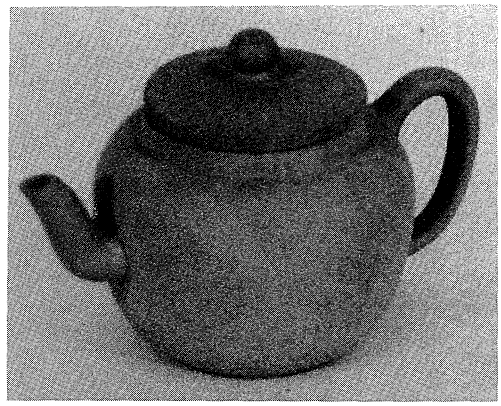
若越郷土研究　四十巻三号

史料紹介

# 越前松平家伝来の二つの徳川吉宗遺品

足立尚計



八代将軍徳川吉宗（一六八四～一七五一）の遺品として越前松平家に伝存する什器が二点ある。今日、越前松平家の什器類は、福井市立郷土歴史博物館に寄託されている越葵文庫約三千点がそれであり、吉宗遺品として伝存する二点の什器も同文庫のものである（松平宗紀氏蔵）。まずは、その史料を概述しておく（筆者注記）

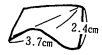
○徳川吉宗所用「土瓶」一点

法量　巾一九・〇糎。口経七・八糎。高一一・一糎。桐箱入　箱表書に「有徳院様御手被遊候土瓶」とある。

○徳川吉宗所用「小形青地錦御巾着并びに虎の爪」附松平春嶽（慶永）筆由緒書　一点・一枚。

法量、（巾着）五・二×六・五糎。

法量、（爪）




由緒書は、松平春嶽（福井一六代藩主＝一八二八～一八九〇）直筆で

虎ノ爪

八代将軍

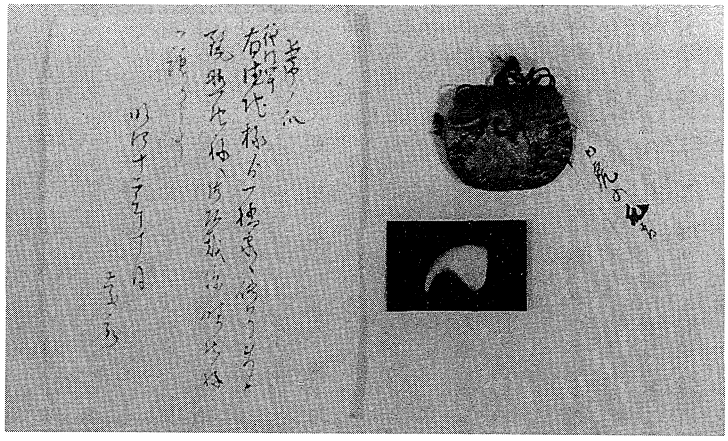
有徳院様ゟ一橋家へ傳ハリ夫ゟ

麗照院様へ御頂戴・凉晴院様

へ譲リ之事

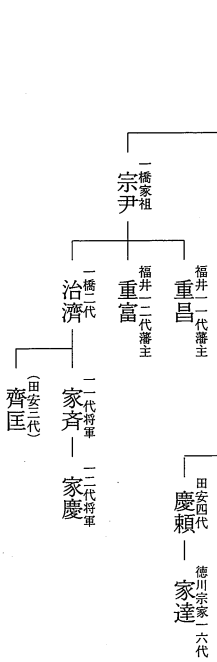
明治十二年十月（慶永）（印）

慶永



と、ある。

さて「土瓶」については、箱表書に由緒を記すだけで、伝来については明らかではない。越前松平家では、吉宗の孫で、一橋宗尹の子、重昌を福井一一代藩主に、次子重富を一二代藩主に迎えているほか、血縁において徳川将軍家と非常に近かった一六代藩主春嶽（慶永）は、一橋二代治済を実祖父に、田安二代治察を実家の祖父に持ち、自らも吉宗の血縁に連なっている（左系図参看）。




このように吉宗の遺品が、伝来しても不思議ではなく箱表書の記述内容も後世の附会とみないほうが自然であろう。

「虎の爪」は、別にもう一点越前松平家に伝存しているが、これについては全くの由緒不明である。「虎の爪」は、錦の巾着に一つだけ納められていることから薬材であったとは考えられず、肌守のようなものであったのであろう。

「虎は千里行って千里帰る（戻る）」の故事があるように、勢いの盛んなさまを肖かって武将が好んだ舶来の珍品であったのであろうか。

さて、虎の爪の由緒書によると、本品ははじめ、吉宗（有徳院）から一橋家へ伝わり、さらに、福井一三代藩主治好夫人で、田安宗武の女、即ち吉宗の孫娘麗照院の手沢愛蔵の品となった。麗照院は、名を定と称し、天明七年（一七八七）に治好へ嫁している。定姫は、歌人で国学者として知られた父、宗武の影響を受け、書画に秀いでたらしく、松平家には、絹本着色「牡丹に軍鶏（しゃも）の図」や、絹本着色「鴛鴦（おしどり）の図」が伝存している。

虎の爪は、さらに麗照院から涼晴院に伝わった。涼晴院は、松平治好の女で、福井藩の支藩にあたる越後高田松平家に嫁した。その涼晴院より春嶽が本品を譲られたのは春嶽が吉宗の血縁に連なることと田安家の出身であったことによるものであろう。将軍徳川家中興の祖と称されながら、遺品の少ない吉宗の所用として伝存する史料であるから興味深い什器である。